



TITLE:

蠻夷の光景：中唐の異文化受容史

AUTHOR(S):

好川, 聰

CITATION:

好川, 聰. 蠻夷の光景：中唐の異文化受容史. 中國文學報 2006, 72: 87-116

ISSUE DATE:

2006-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177982>

RIGHT:

蠻夷の光景

——中唐の異文化受容史——

好川

聰

京都大學

一 はじめに

中唐と呼ばれる時代、中でもその最盛期に當たる元和期を代表する文人達——韓愈、柳宗元、劉禹錫、白居易、元稹——は、その官歴の中で中央から遠く離れた南方の蠻夷瘴癘の地に左遷された経験を一度ならず持つている。^①もちろん、南方に左遷されること自体は中唐以前においても別段珍しいことではない。しかし、元和期の文人達のそれまでの文學に見られなかった特徴として、その蠻夷の土地にある獨特の氣候、生態、風俗などを詩の中で事細かに綴っている點が挙げられよう。こうした蠻夷獨特の自然や風俗

蠻夷の光景（好川）

は、中唐以前は中原と異なる異質なものとして無視され、詩作の中で描かれることはきわめて稀であった。初唐の沈佺期や宋之問などの詩の中に、蠻夷の自然を描いた句が散見している程度であり、その土着の民の風俗などにも着目したまとまった量の蠻夷描寫は、陽山に左遷された韓愈を皮切りとして、貞元の末から元和年間にかけて各文人達によつて盛んに描かれていくことになる。こうした蠻夷を題材とした詩は中唐において文人達が異文化を如何に認識していたか、ひいては中唐文學の全體像を把握する上で非常に重要なものであるが、その研究は柳宗元や劉禹錫など個々を取り扱った研究がいくつか見られる程度であり、全體を俯瞰した研究は日本でも中國でも爲されていない。^②

これら中唐の蠻夷描寫の全體像を考察するに當たつて、その足がかりとして重要な鍵となるのが、過去から現在に至る境遇を綴った長編詩の存在である。本稿では便宜上、このような詩を「回想詩」と名付けることにするが、中唐の元和期に左遷された文人達は、その土地でこうした回想詩をこぞつて作っているという共通した特徴を持っている。

これら回想詩の源流は杜甫に求めることができ、杜甫はその前半生においては、「自京赴奉先縣詠懷五百字（京より奉先縣に赴く詠懷五百字）」や「北征」など時事を含めてこれまでの人生を回顧した長編詩があり、また晩年には、自傳的な長編詩の「壯遊」などの作品があり、中唐の回想詩は杜甫のこれらの作品群の影響を受けて作られたものといえよう。^③この回想詩自體も、中唐になって集中的に出現しはじめたものであり、自己認識など様々に興味深い内容を含んでいるが、それらに關する考察は別の機會に譲ることにして、本稿において重要なのは、中唐の左遷された文人達は、その回想詩の中で蠻夷獨特の自然や風俗をかなりの句數を費やして描寫していることにある。さらに、蠻夷に對する描寫はどの文人も概ねまず回想詩によって初めて本格的に綴られ、以後蠻夷の風土や風習自體を主題とした作品が作られていく側面もある。こうした現象が見られる一因を挙げれば、從來では主題となりえなかったものが、回想詩の中で描かれることによって、文人達自身にその題材の面白さが自覺されるようになり、それを主題とした題材も

描かれるようになっていった、といった流れが推測できるが、いずれにせよ文人達がその初期段階において蠻夷を如何に認識し表現していたかを考察する上で、回想詩は大きな鍵となるのである。

中唐の中で蠻夷の自然や風俗を取り扱った詩は數多くあり、限られた紙面で全體を網羅して論じることが難しい。本稿では特にこの回想詩に着目し、そこに描かれる蠻夷描寫を軸として、中唐の文人達が蠻夷の自然風俗をどう認識し、いかに表現していったかその全體像を探ってみたい。

二 陽山の韓愈——蠻夷描寫の嚆矢

前章で中唐における蠻夷描寫は韓愈を皮切りとして始まると述べたが、まずその韓愈の作品から検討していくと、韓愈は監察御史の官にあった貞元十九年冬（八〇三）に突如陽山縣令への轉任を言い渡され、翌貞元二十年（八〇四）の春に陽山に赴任することとなる。陽山縣は連州（現廣東省）に屬し、雁もこれよりは南に行かないとされた大庾嶺をさらに越えた先にある、當時の概念からすれば最果てに

あつた。陽山に赴任していた頃の詩作は二十首ほど残されているが、翌貞元二十一年（八〇五）に作られた「縣齋有懷」^④は、青年時代から現在までの境遇を綴った四十韻の仄韻の排律の回想詩であり、陽山期の韓愈を代表する詩作といえよう。^⑤

詩全體の流れは、青年期の過剰なまでの自負に満ちた將來への抱負を語るも、實際には政界のつてもなく、進士の試験にどうにか合格して低い官職を轉々とする苦勞が綴られており、現在陽山に左遷されている勞苦を述べた後、皇帝の即位に伴い恩赦が我が身にも施された曉には、官を辭めて嵩山の邊りでのどかな隱居生活を送りたいと記して詩が終えられている。その中で、陽山貶謫の身にある感慨を綴った一段、五十三句目からの十六句を取り上げると、

投荒誠職分 荒に投ずるは誠に職分

領邑幸寬赦 邑を領するは幸いに寬赦

湖波翻日車 湖波 日車を翻し

嶺石圻天鱗 嶺石 天鱗を圻く

毒霧恆燠晝 毒霧 恆に晝に燠び

蠻夷の光景（好川）

炎風每燒夏 炎風 毎に夏に燒く

雷威固已加 雷威 固より已に加わり

颶勢仍相借 颶勢 仍ち相い借る

氣象杳難測 氣象 杳として測り難く

聲音吁可怕 聲音 吁 怕るべし

夷言聽未慣 夷の言 聽けども未だ慣れず

越俗循猶乍 越の俗 循えども猶お乍る

指摘兩憎嫌 指摘して兩つながら憎み嫌い

睢盱互猜訝 睢盱として互いに猜訝す

祇緣恩未報 祇だ恩の未だ報いざるに緣るも

豈謂生足藉 豈に生は藉るに足れりと謂わんや

中原からはるか離れた荒漠たる地に投じることこそ誠にわが職分だ、小さいながらも縣令として村を領有できたのは幸いにも寛大なる處分のおかげである、というのほもちろん内心を覆い隠すための大仰な表現であり、無理矢理自分をそうやって納得させて、澁々陽山へ赴任する韓愈の姿が窺われる。續く二句はその陽山へ向かう道中のことが記されており、天を壞さんばかりの激しい自然はその先にあ

る陽山の自然環境への不安を想起させるものであつたろう。

次の句から陽山の様子、まずはその氣候を述べる。「毒霧」は瘴氣を指し、南方の湿度の高さを示しており、その瘴氣が日中はいつもくすぶつて我が身を脅かし、夏は炎の如き熱風が常に我が身を焼き焦がす。さらに雷と「颶」という南方獨特の暴風（颱風を指すか）^⑥とが相乗しあつて激しさを増すばかり。このように陽山の氣象は全く測りがたいものであり、その轟音は恐るべきものであると、この六句は想像を超える氣候條件について語られている。

氣候の次は民衆について觸れられているが、その言葉はいくら聞いても慣れないし、その風俗にいくら倣おうとしても上手いかな。官と民とがお互いを指さして憎み合い、ぎよろりと疑惑の視線を向け合っているという、全く噛み合わない様子が描かれる。最後の二句は、寛大な處分への御恩にまだ報いていないからこうしているが、縣令くらの俸祿では到底生活に資するには十分でないと、陽山に仕方なく留まつてゐる心情がありありと綴られて、陽山の感慨を述べる段の締め括りとしてゐる。

一見して分かるように、蠻夷の風土に全くなじめずに嫌惡する自己の姿を描くのが、陽山における韓愈の蠻夷描寫の特徴であるが、さらに別の資料を挙げると、「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士（江陵に赴く途中、王二十補闕・李十一拾遺・李二十六員外の翰林三學士に寄贈す）」は、「縣齋有懷」と同年、憲宗の即位に伴い改元された永貞元年（八〇五）に、即位に伴う恩赦に遇い、陽山から江陵に赴く道中で、陽山へ左遷された經緯から恩赦に遇い現在に至るまでの境遇を綴った百四十句に及ぶ古體詩である。

その中で、陽山にいた頃の様子を振り返った六十五句目からは、「縣齋有懷」より詳細に陽山の風土が述べられている。

遠地觸途異	遠地	途に觸れて異なり
吏民似猿猴	吏民	猿猴に似たり
生獐多忿很	せいとう	生獐にして忿很多く
辭舌紛嘲嘲	せいつ	紛として嘲嘲たり
白日屋簷下	白日	屋簷の下

雙鳴鬪鵲

雙鳴して鵲さつりやう鬪う

有蛇類兩首

蛇の兩首に類する有り

有蠱羣飛游

蠱この羣飛して游べる有り

窮冬或搖扇

窮冬 或いは扇を搖らし

盛夏或重裘

盛夏 或いは裘を重ね

颶起最可畏

颶の起こるは最も畏るべし

旬哮簸陵丘

旬哮じゅうこうして陵丘あおを簸る

雷霆助光怪

雷霆 光怪を助け

氣象難比侔

氣象 比侔し難し

癘疫忽潛遘

癘疫れいえき 忽ち潛遘し

十家無一瘳

十家に一も瘳いゆる無し

猜嫌動置毒

動やもすれば毒を置かかと猜嫌し

對案輒懷愁

案に對して輒ち愁を懷く

まず最初の四句では、現地の役人といひ民衆といひまるで猿そっくりで粗野獐猛、怒りつぽく、ごちゃごちゃと口うるさく噛み付いてくる土着の民の様子が描かれているが、先の詩よりもより野蠻に表現されており、生理的に受け付けられない韓愈の心情が示されている。次に生態系について述

蠻夷の光景（好川）

べ、「鵲」という夜の不吉な鳥であるフクロウが、晝間にも關わらずうるさく鳴いて争ひ合っており、「蠱」という毒虫が大量に外を謳歌しておちおち散策もしていられないという異常な、心理的に壓迫された様子が見て取れる。

續く六句でその氣候について觸れ、眞冬でも團扇をあおぐ程の暑さを感じたり、眞夏でも毛皮の服を上から羽織る程の寒さを感じたりと、氣候の激しい變化がオーバーに描かれ、先の詩にも取り上げられた「颶」という南方獨特の暴風雨が起れば丘を突き上げんばかりに吹きつけ、物の怪の如き雷が激しく轟きわたり、中原とは全く比較しがたない氣象であると先の詩と同じ感想を述べる。そして最後には、懼れば治る見込みのない風土病が恐ろしくて、食卓に向かつて風土病の毒に感染してしまわないかと疑心暗鬼になってしまう自己のびくびくした姿が描かれている。

陽山の風土について觸れた詩は、他には「陽山窮邑惟猿猴（陽山の窮邑 惟だ猿猴）」（劉生）など散見して見られる程度であり、まとまった量の蠻夷描寫は「縣齋有懷」と

「赴江陵道中……」の二つの回想詩によつて語られるのみである。この二つの詩を見て分かるように、陽山期の韓愈の蠻夷描寫の特徴は、民衆も、生態系も、氣候も、敵意を持つて自分に襲いかかってくるかのような、自分には到底受け入れがたい對立するものとして表現されているところにある。ただ、その表現は大げさで極端であり、誇大化して描く傾向があるといえよう。その民衆や氣候の描寫は、實際にどうであるか觀察しようとする意志や態度よりも、民衆の様子を猿のようだと一刀兩斷したり、その氣候を「測り難し」「比侔し難し」と理解不能なものとして描いたりしているように、「蠻夷は理解しがたい受け入れがたいもの」という色眼鏡を通して描かれた印象を強く受ける。蠻夷には文化など存在せず、氣候も中原と全く異なるという固定觀念を通じて、それを極端に表現しているのであり、またその極端さが韓愈の蠻夷描寫の面白さでもあるのだ。

ただ、いやいやながらも蠻夷を描寫の對象としてその様子を延々と綴ることは、逆に考えれば好奇の視線の裏返しであるともいえる。そもそも眞に受け入れがたい存在であ

れば描寫の對象にすら成り得ない。實際に中唐以前には蠻夷特有の奇怪な風土風俗はほとんど無視されて、わざわざ詩の中で描かれることは無かった。そうした存在を敢えて描こうとする姿勢には、留意しなければならないだろう。

三 柳宗元と劉禹錫——永貞の改革の挫折者

前章で述べた韓愈を皮切りとする蠻夷描寫がどのように展開していくか、次にその後半生を蠻夷の地で過ごした柳宗元について論じたい。

柳宗元は王伾・王叔文をリーダーとする永貞の改革に荷擔するも改革は頓挫し、永貞元年末（八〇五）から元和十年（八一五）までを永州（現湖南省 司馬、そこで一端長安に召還されるも二ヶ月ほどで今度はさらに南方の柳州（現廣西壯族自治區）刺史に左遷され、元和十四年（八一九）にその地で生涯を閉じるという經歷を持つている。

一般的に永州での柳宗元の作品は、「永州八記」や王孟韋柳と稱される山水詩が有名であり、一見すると永州は風光明媚な風景の隠された美しい場所であるかのように誤解

されることもあるが、実際には柳宗元がその書簡文の中で度々言及しているように、柳宗元にとって永州の自然は、前章で述べた陽山のように劣悪な環境であつた。^⑦柳宗元がこうした蠻夷の風土を積極的に描き出すのは、柳州刺史に再度左遷されてからであり、永州期には、そうした蠻夷獨特の劣悪な環境について述べた詩はほとんど残されていない。

しかし、例外的に蠻夷描寫に言葉を費やした詩が二首残されている。まず一つは、元和四年（八〇九）に作られた「酬韶州裴曹長使君寄道州呂八大使因以見示二十韻（韶州裴曹長使君の道州呂八大使に寄せ、因りて以て示さるるに酬ゆ二十韻）^⑧」である。裴曹長が誰を指すかは分からないが、韶州（現廣東省）とあるから柳宗元と同じく南方に左遷された人であり、呂八大使は呂溫のことで永貞の改革の仲間で柳宗元とは従兄弟の間柄でもある。その呂溫も永州にほど近い道州（現湖南省）に左遷されていた。詩の前半は蠻夷に流された二人の經歷や現在の状況を綴り、後半は永州での自らの境遇が述べられている。その永州の様子を述べた

句を挙げると、

海俗衣猶卉

海俗 衣は猶お卉なり

山夷髻不鬟

山夷 髻は鬟（なま）ねず

泥沙潛虺蜮

泥沙 虺蜮（きよく）潛み

榛莽鬬豺獍

榛莽 豺獍（さう）鬬う

循省誠知懼

循省して誠に懼るるを知り

安排祇自憫

安排して祇自ら憫（あは）しむ

食貧甘莽鹵

食貧しく莽鹵に甘んじ

被褐謝爛熳

褐を被りて爛熳（らんまん）を謝（まじ）わる

遠物裁青闥

遠物 青闥（せいけつ）を裁ち

時珍饌白鸚

時珍 白鸚（はくかん）を饌（そな）う

最初の句は『尚書』禹貢の「島夷は卉の服なり」に基づき、水際に住まう人々はいまだに草で作った服をまとった、山に住まう異民族は髪を束ねずじたりなど、文化の感じられない原始的な風俗を受け入れがたく感じている様子が表れている。次の句は柳宗元の書簡文にも度々述べられる生態系の危険性について觸れ、泥濘や砂地にはマムシやいさご虫が潛み、林や草原では「豺」や「獍」が争って

⑨「豺」はやまいぬ、「獾」は狼の類とも虎の類ともされるが、「魍魎」も含めていずれも悪人に喩えられるような獐猛な動物であり、出歩くには極めて危険な環境を表現している。

後半は自らの衣服と食生活について述べ、鹽分が多く雑草の生え繁る瘦せた土地での貧しい食生活に甘んじ、粗末な衣服を着て色が混じり合った服を拒絶する。「爛爛」は「爛爛」とも「爛斑」とも書かれ、色が混じり合った艶やかな模様が原義であるが、ここでは『後漢書』南蠻傳に「衣裳は斑蘭たり」とあるのを踏まえており、そうした南蠻の艶やかな服装は受け入れられず粗末な服を敢えて着る惨めさを表している。最後は中央へ送る遠方からの貢ぎ物として「罽」という青い毛織物を裁斷し、時節の珍品として銀色の雉をお供えするという、どちらも南方の特産に關して述べられている。^⑩

このように韓愈の蠻夷描寫とはある程度共通しつつも、また違った面も見受けられるが、先に永州期の蠻夷を描寫したもう一首を取り上げると、「同劉二十八院長述舊言懷

感時書事奉寄澧州張員外使君五十二韻之作因其韻增至八通贈二君子（劉二十八院長（劉禹錫）の舊を述べ懷を言い、時に感じて事を書し、澧州張員外使君（張署）に寄せ奉る五十二韻の作に同じくし、其の韻に因りて増して八十に至り、通じて二君子に贈る）」は永州左遷時期の後半、「永州八記」が完成した翌年に當たる元和八年（八一三）に作られた五言排律の唱和詩である。先の詩が二十韻であつたのに對して八十韻と大幅に句數が増えており、古體も含めて柳宗元の現存する詩の中では最も長い。

その内容は、最初に若かりし頃の官歷を張署の官歷を重ね合わせつつ振り返り、八十二句までの前半は自分と同じように蠻夷の地、虔州（現江西省）刺史に左遷されつつも今は罪をやや輕減されて澧州（現湖北省）刺史の任にあつた張署の事跡を辿り、八十三句からの後半は對照的に永州に左遷されたままの柳宗元自身の境遇を語る一種の回想詩といえよう。^⑪ その一〇五句目からは、「永州八記」で述べられているような自然とはかけ離れた様子が描かれている。

泉族音常聒

泉族きんしやう 音は常に聒かたしく

豺羣喙競呀

豺羣 喙は競いて呀く

岸蘆翻毒蜃

岸の蘆は毒蜃翻り

篋竹鬪狂摩

篋の竹は狂摩鬪う

野鷺行看弋

野鷺 行ゆく弋を看

江魚或共扱

江魚 或いは扱を共にす

瘴氣恆積潤

瘴氣 恆に潤を積み

訛火亟生燬

訛火 亟しば燬を生ず

耳靜煩喧蟻

耳は靜かにして喧蟻に煩い

魂驚怯怒蛙

魂は驚きて怒蛙に怯む

風枝散陳葉

風枝 陳葉を散じ

霜蔓綆寒瓜

霜蔓 寒瓜綆つ

霧密前山桂

霧は前山の桂に密に

冰枯曲沼蘊

冰は曲沼の蘊を枯らす

最初の六句では様々な動物が描寫されている。「梟」は『説文』に「不孝の鳥」と説明されるフクロウの一種であり、先の詩にも出た「豺」共々、どちらも群れをなして四六時中けたたましく鳴き吠えている。毒を持つ蛤や狂亂した巨大な牛のために蘆の生える岸邊や谷間の竹林を散策す

る際にも常に注意を拂わなければならない。續く「弋」や「扱」は現地の人の狩獵の様子を表していると思われるが、前後と繋げて讀むと凶暴な動物ばかりが我が物顔に暴れ回り、アヒルなどの普通の動物が逃げ回っているような印象を受ける。

續いて自然環境をいう。瘴氣が常に肌にべとつき、「訛火」という野火がしばしば火災を發生させる。次の句の蟻の音というのは、『世說新語』紙漏篇に殷仲堪の父が神經過敏になる病でベットの所で蟻が動く音を聞いても牛が喧嘩していると思ったという故事があるように、蟻や蛙などの小動物の物音ですらびくびくしてしまふ精神の不安定さを表している。續く四句では植物の様子について述べられているが、風が葉を散らし、霜が瓜を落とし、氷が蓮の葉を枯らすなど、積極的に生命を奪い取るかのような惡意ある蠻夷の風土を感じさせている。

また、この後にも「御寒衾用罽、挹水勻仍椰（寒さを御ぐに衾は罽を用い、水を挹むに勻は仍ち椰）」（一二三、一二四）のような先の詩にも出た「罽」という着慣れない毛織物で

寒さを凌いだり、椰子の實の殻を柄杓代わりにして水を汲むという中原文化からは到底理解できない習慣や、「俚兒供苦筍、僮父饋酸楂（俚兒 苦筍を供え、僮父 酸楂を饋る）」（一四三、一四四）のような土着の子供や大人から苦い筍や酸っぱいしどみを勧められる様子が描かれ、現地の人との交流が窺える句も見受けられる。

このように柳宗元の蠻夷描寫も韓愈と同じく、危険な生態系や理解しがたい土着の民衆が描寫の中心となっているが、韓愈と比べて、異民族の服裝や椰子の實を使って柄杓とするなど、獨特の習慣や土着の民と交わる様子が描かれており、異民族を猿のようだと切り捨てている韓愈にはない要素も含まれている。韓愈よりも具體性に富む描寫も見られ、より蠻夷の風俗を見つめようとする姿勢が垣間見えるのである。しかしながら、その基調とするところは韓愈と同じであり、蠻夷の風土は自分にとって受け入れがたい嫌惡感を催す存在として描かれている點においては變わりはないといえよう。

ただ、嫌惡感という點では共通しながらも、讀み手に與

える印象は韓愈と柳宗元とで異なっているように感じられる。韓愈の表現は、例えば氣象描寫の動態に富んだり誇張させたりする大げささ、民衆を猿のようだと切り捨てる小氣味良さ、食事の際に神経過敏に反應しすぎる自己の姿を描くある種の滑稽さなど、そういったものが感じられるのに對して、柳宗元の表現には、韓愈のような激しさ大げさはなく、全體的に淡々と靜かに展開していき、その中で苦しみにあえぐ自己の姿が一貫して描かれている。そうした靜かな調子で蠻夷の地にいる苦しみを綴っているところに、柳宗元の永州に幽閉されている深く暗い悲哀が、より強調されてくるように感じられるのである。

こうした違いを生み出した一因に、左遷された狀況の違いも考慮しなければならない。韓愈が陽山に左遷された原因は、韓愈本人にもよく分からなかったらしく、現在の研究においても正確な結論が出ていないのだが、一方の柳宗元は永貞の改革に失敗して以後の政治生命を決定的に絶たれた境遇にあった。こうした左遷の重みの違いが詩の表現に影を落としている點は否定できないだろう。ただし、柳

宗元と同じく永貞の改革の失敗で朗州（現湖南省）に左遷された劉禹錫と比べると、また事情は異なってくる。次に劉禹錫詩との比較に移りたい。

先に引用した柳宗元の詩は劉禹錫の五十二韻の作に唱和したものであるが、その劉禹錫の元の作品は残念ながら現存していない。しかし、劉禹錫には朗州司馬として赴任した当初の元和元年（八〇六）に、「武陵書懷五十韻」^⑬という回想詩を書き残している。时期的には柳宗元の二例より前に位置するこの五言排律は、「西漢開支郡、南朝號威藩（西漢 支郡を開き、南朝 威藩を號す）」とこの地の由來から語り始めて、武陵、つまり朗州の自然や風俗を述べる三十六句目までと、三十七句目から自分のこれまでの人生の軌跡を順を追って述べる回想部分の、大きく二つに分けられる。これは先に挙げた韓愈や柳宗元の回想詩と異なり、蠻夷の風土を述べるくだりが最初にくるという、時系列からすれば順序が逆になっている點にまず違いがある。その前半の、蠻夷の風土について述べた十三句目から引用する

蠻夷の光景（好川）

と、

戸算資漁獵	戸算は漁獵に資し
鄉豪恃子孫	鄉豪 子孫を恃む
照山畚火動	山を照らして畚火動き
踏月俚歌喧	月を踏みて俚歌は喧し
擁楫舟爲市	楫を擁 <small>いだ</small> きて舟は市を爲し
連薨竹覆軒	薨 <small>いら</small> を連ねて竹は軒を覆う
披沙金粟見	沙を披けば金粟見え
拾羽翠翹翻	羽を拾 <small>すい</small> えば翠翹 <small>きよう</small> 翻る
茗圻蒼溪秀	茗は蒼溪の秀を圻 <small>き</small> き
蘋生枉渚喧	蘋 <small>うりくさ</small> は枉渚の喧に生ず

はじめに農業ではなく漁業や狩獵でもって税金を納めている土地の豪族について觸れ、續けて「畚火」という南方獨特の焼き畑農業や、月下に地を踏んで歌い踊る土地の祭りの様子、船が市場になっているという水運の發達した南方ならではの珍しい光景や、竹で屋根を覆うこれも南方獨特の住まいなど、土着の民の生活の様子が列擧されていく。次の「金粟」は砂金のこと、「翠翹」は女性の頭につける

裝身具のことで、次の二句にはわざわざ自注で「蒼溪茶爲邑人所重、枉渚近在郭東（蒼溪の茶は邑人の重んずる所と爲り、枉渚は近く郭東に在り）」と説明されており、土地の銘茶や近郊の様子であることが窺える。續く八句の引用は省略するが、「格磔^{かくたつ}」と獨特の聲で鳴く南方の鳥や、地元の古跡や故事について述べた後、三十一句目から前半部終わりまでは、

虎咆空野震　虎咆えて空野震え

鼉作滿川渾　鼉^{わづ}作りて滿川渾^ちる

鄰里皆遷客　鄰里　皆遷客なるも

兒童習左言　兒童　左言を習う

炎天無冽井　炎天　冽井無く

霜月見芳蓀　霜月　芳蓀を見る

と、大地を震えさせる虎の咆哮、川の水全てを濁らすほどの鰐の動作という獐猛な動物の様子が描かれ、續けて御近所はみな北方から移り住んできた家族であるのに、子供は「左言」つまり地元の方言を覚えていってしまい、親の意向に關わらず子供は勝手に現地の言葉を身につけるとい

よく理解できる光景を映し出している。終わりの二句では冷たく清い水の出る井戸が無く、冬でも季節外れの花を見るところという南方の氣溫の高さを述べて蠻夷描寫のくだりが終えられている。

途中引用を省略したが、以上の二十四句が朗州の土地、風俗について述べたものである。この描寫と先に挙げた韓愈や柳宗元の描寫を比べたときに、同じ蠻夷描寫でありながら大きくその特徴が異なっていることに氣づく。

まず氣づくのは、描寫の對象となる事柄が異なっていることである。先に挙げた例に見られる韓愈や柳宗元の蠻夷描寫は、劣悪な蠻夷の氣候や生態が中心であり、土着の民衆に目を向けた部分は、韓愈は怒りつづけて五月蠅い猿のようだと一蹴しており、柳宗元は韓愈に比べると注意を拂っているがその文化性を認めてはおらず、その異民族獨特の生活ぶりに對してほとんど重點が置かれていない。それに對して、劉禹錫の蠻夷描寫の主な興味の對象は、土着の民の生活習慣、風俗である。土地の祭りや、船を市場とし竹を屋根とする珍しい光景、焼き畑、砂金、土地の茶の栽

培などの産業の様子、このような中原には見られない土地の習慣や産業を描き出すのが中心となっているのである。

またそれと関連して言えることだが、韓愈や柳宗元の蠻夷描寫は嫌惡感や拒絶感を基調としているが、劉禹錫の表現には基本的に蠻夷にいる嫌惡感を感じさせない點にも大きな違いがある。例えば柳宗元は蟻と蛙に述べた箇所で「喧蟻に煩い、怒蛙に怯む」というように、「煩う」「怯む」という自己の嫌惡を表す動詞を使って、惡意を持って働きかける蠻夷の自然と自分という關係を語っており、他にも「聒^{かまひ}し」「散ず」「枯らす」など否定的な感情を伴う動詞が多く用いられている。韓愈も同様であり、基本的に自己との關係の中で蠻夷を語ろうとする姿勢が貫かれている。一方、劉禹錫は、自己とその風土や風俗がどういう關係にあるのかを語ろうとせず、基本的に好奇の視線も入り交じった觀察者の立場に終止しており、書き手の主觀的な判斷、感情があまり記されていないのである。

こうした劉禹錫と柳宗元の蠻夷描寫の對照的な違いはその後で作られた蠻夷に關する詩にも踏襲されている。一例

蠻夷の光景（好川）

として、劉禹錫の「莫徭歌」と柳宗元の「柳州峒氓」を舉げたい。どちらも異民族を主題とした詩であるが、まず連州刺史の時期に作られた劉禹錫の「莫徭歌」では、

莫徭自生長 莫徭 自ずから生長し

名字無符籍 名字 符籍に無し

市易雜鯨人 市易 鯨人に雜わり

婚姻通木客 婚姻 木客に通ず

星居占泉眼 星居して泉の眼を占い

火種開山脊 火種して山の脊を開く

夜渡千仞谿 夜に千仞の谿を渡り

含沙不能射 含沙も射る能わず

「莫徭」というのは、『隋書』地理志下に「長沙郡又雜有夷蜒、名曰莫徭。自云其先祖有功、常免徭役、故以爲名（長沙郡に又た雜えて夷蜒有り、名は莫徭と曰う。自ら云う其の先祖に功有りて、常に徭役を免る、故に以て名と爲す）」と名の由來が語られており、冒頭ではそれを踏まえ、名字が名簿に書かれることがないから税を納める必要がなく、役所の與り知らぬところで生活を営んでいる様子が描かれている。

る。續けて、水邊の異民族との交易、山邊の異民族との婚姻、星の如くまばらに構えた住居、泉の湧き出る場所を探す占い、山を切り開く焼き畑など異民族獨特の生活ぶりを列擧し、結句では、暗い夜中でも怯むことなく深い溪谷を渡っていき、「含沙」という毒虫も彼らを襲うことができないと、中原とは全く異なる彼らのたくましい生活ぶりが描かれている。この詩からは敘情性や寓意性などは讀み取ることができず、ただ劉禹錫の異民族への關心や好奇心から詩が作られているのが分かる。

このように、劉禹錫の蠻夷描寫は「武陵書懷五十韻」を皮切りとするが、その觀察者としての姿勢は一貫して引き繼がれている。劉禹錫は他にも例えば、田植えの曲を詩の中に取り入れた「插田歌」、土地の祭りのボート競争の様子を描いた「競渡曲」、莫徠とは別の異民族の様子を觀察した「蠻子歌」など、土着の民の風習風俗を主題にした作品が多く見られ、そのいずれもが「武陵書懷五十韻」に見える蠻夷描寫の特徴を引き繼いでいるのである^⑭。そしてそういう態度が、夔州において民間の歌謠を採録した有名な

「竹枝詞」が作られることへと繋がっていき、それは劉禹錫の文學の特徴の一つを形作っていると言えるのである。

一方、柳宗元も柳州の刺史に赴任して以降は、永州期から詩風が一變して、蠻夷の風景や民衆を題材にした詩も作っているが、その表現技法に關しては變化が見られるものの、その蠻夷に對する認識そのものは永州期とほとんど異なるところがない^⑮。「柳州峒氓」では、

郡城南下接通津 郡城 南に下りて通津に接す

異服殊音不可親 異服 殊音 親しむべからず

青箬裹鹽歸峒客 青箬 鹽を裹みて峒に歸る客

綠荷包飯趁虛人 綠荷 飯を包みて虚に趁く人

鵝毛禦臘縫山罽 鵝毛 臘を禦ぎて山罽を縫い

鷄骨占年拜水神 鷄骨 年を占いて水神を拜む

愁向公庭問重譯 公庭に重譯を問うことを愁い

欲投章甫作文身 章甫を投じて文身を作さんと欲す

領聯では、楚の言葉で竹の皮を意味する「箬」で鹽を包んで住まいの洞穴に歸っていく人や、南方の俗語で市を表す「虚」に連の葉で握り飯を包んでやってくる人と、その

土地の方言を用いることでより現場の雰圍氣の溢れる光景を描き出している。また頸聯では、アヒルの毛で縫われた「山罽」という毛織物で寒さを凌ぎ、鶏の骨で一年を占って水の神を拜む様子など、「罽」は先の二十韻や八十韻の詩にも用いられた蠻夷の風俗を示す常套句であるが、先の詩よりもさらに具體的に異民族の生活の様子が四句の中で表現されているのが分かる。しかしその四句を挟んで、二句目では異なる服装や言語には到底親しみが持てないと述べ、結句では役所仕事で通譯を通すことが面倒であるから刺青をつけて身も心も異民族と同化してしまいたいと半ば投げやりに詩が終えられているように、基本的にこの詩も蠻夷の風習に對する受け入れがたい違和感が貫かれているのである。柳宗元の詩は、記録者の態度のような劉禹錫に比べて、いやな氣持ちを全面に押し出すことでかえってその存在が身近に感じられて、臨場感のある光景を描き出している要因となっており、それが柳宗元の詩の魅力ともいえるだろう。

柳宗元は柳州に骨を埋めるまでは、劉禹錫とほとんど同

蠻夷の光景（好川）

じ經歷を辿っている。この二人は科擧を合格した年まで同じであり、これほど同じ經歷を辿りながら、蠻夷描寫にかくも違いが認められるのは、詩人としての個性の差がそうさせたといえるだろう。より突きつめれば、二人の根底に潜む、詩作とは如何にあるべきかという文學の根本的な姿勢の相違が見えてくるように思われるが、それは別の機会に改めて考えてみたい。

少し話がそれだが、柳宗元の土着の民に對する描寫はその文化性の低さを嫌惡する方向で描かれている。また、陽山における韓愈は民衆は猿のようだと一顧だにしない。それに對して、劉禹錫の蠻夷描寫が描く主な對象は、その土着の民の風俗や産業、つまり文化ともいえるべきものである。つまりそれは、中原とは異質な文化や文明といえるもののへの興味、好奇の視線の表れであり、異質でありながらもその價值を認めて詩中に記録していくところが、劉禹錫の蠻夷描寫の特徴なのである。

四 白居易と元稹——百韻の應酬詩

續いて元和年間の後期に作られた回想詩に目を向けてみると、白居易が江州（現江西省）司馬に左遷されていた時期の元和十二年（八一七）に各地の友人達に詩を寄せた「東南行一百韻 寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十二補闕杜十四拾遺李二十助教員外寶七校書」^⑩という回想詩がある。長安から見て東南に左遷されたから「東南行」と名付けられたこの百韻にも及ぶ長編の排律は、江州へと至る道中の景色から江州の風土や民衆の生活の様子を述べた第一段、都にいた頃の華やかなりし生活と友人達との交流を述べた第二段、江州へ左遷されて以降の感慨を述べた第三段と、全體を三段落に分けることが出来る。

このように過去の回想よりも蠻夷の光景をまず冒頭に置くのは、韓愈や柳宗元の回想詩と異なっており、劉禹錫の「武陵書懷五十韻」と同じ構成であるが、その内容も劉禹錫のそれと同じく、好奇の視線から蠻夷の風俗、産業、風

土などが仔細に觀察され綴られていく。こうした觀察者の態度は、十句目に「深知土產殊（深く土產の殊なれるを知る）」と述べた言葉にもよく表れている。「土產」という蠻夷の中でより限定されたその土地の産業という要素を、「懼れる」や「嫌う」のではなく「深く知る」と表現しているところに、白居易の蠻夷に對する基本的な姿勢が見て取れるのである。そして、續く十一句目からの蠻夷描寫の内容も「武陵書懷」と共通する要素が多い。

夷音語嘲啗

夷音 語は嘲啗ちやうたん

蠻態笑睢盱

蠻態 笑うこと睢盱したり

水市通闌闌

水市は闌闌かんかんに通じ

煙村混舳舻

煙村は舳舻を混ず

吏徵漁戶稅

吏は漁戶の稅を徵し

人納火田租

人は火田の租を納む

亥日饒蟹

亥日 蝦蟹かいかい饒く

寅年足虎羆

寅年 虎羆こらふ足る

成人男作巾

人と成りて男は巾かんを作し

事鬼女爲巫

鬼に事えて女は巫と爲る

樓閣攢倡婦

樓閣くして倡婦を攢め

堤長簇販夫

堤長くして販夫簇がる

夜船論鋪賃

夜船 鋪を論じて賃し

春酒斷餅沽

春酒 餅を斷ちて沽る

見果皆盧橘

果を見れば皆な盧橘

聞禽悉鷓鴣

禽を聞けば悉く鷓鴣

「嘲啞」は柳宗元の詩に「嘲啞鳴山禽（嘲啞として山禽鳴

く）」（巽公院五詠 苦竹橋）とあるように鳥の鳴き聲を表

す擬音語、「睢盱」は韓愈の「縣齋有懷」にもある目を見

開く様子を表す擬態語であり、異民族の喋る言葉が鳥の囀

りのようで聞き取れない様子や、目を見張って笑う變わっ

た笑い方に驚く様子が描かれている。水邊の市場は市街地

にも通じ、煙に包まれた村では船が押し合いへし合いして

いるというのは、「武陵書懷」に見える船の市場の様子を

彷彿とさせる。次の現地の役人は漁業から税を徴收し、民

衆は焼き畑農業から租税を納めるというのも、「武陵書懷」

に共通する異民族の特徴を描いている。「亥日」という市

場開きの日には海老や蟹などの水産物が店頭に溢れ、寅年

蠻夷の光景（好川）

には獐猛な獣が多く表れて危険である。次の「卯」はあげまきという角型の髪型のことで、中原では子供の髪型として定着しているのに、南方では大人がこの子供の様な髪型をしているというおかしさや、女性が鬼神に仕えるという昔の風習が今でも残っているという時代錯誤な様子が表現されている。續いて、暗い樓閣に群がっている娼婦、長い堤防沿いに亂立している出店、船では宿代をめぐって言い争っている場面や瓶を叩き割って酒を賣る騒々しい様子が描かれ、夜の水邊でも非常に賑やかで色町や出店の發達した様子が窺える。次の「盧橘」と「鷓鴣」も南方特有の果物や鳥を表し、南方ならではの風物で埋め盡くされているような感覚が述べられている。以下は引用を省略するが、このように江州の風俗や風土と自分とが基本的に對立することなく、その様子が生き生きと描かれているのである。こうした時系列に沿って回想せず、冒頭から蠻夷の様子を列擧する劉禹錫や白居易の回想詩は、韓愈や柳宗元の回想の後半で蠻夷描寫を行う回想詩とは、その蠻夷描寫の性格が大きく異なっていることが分かる。實際「武陵書懷」

では序の中でその風俗を寫し出すことが執筆の動機と明記されており、白居易の回想詩もその構成上、蠻夷の獨特な風俗や風土を述べることに自體が大きな目的の一つであるかのように感じられるのだ。まず自身の回想よりも先に蠻夷の風土風物を並び立てているのは蠻夷への強い興味がそうさせているのだともいえ、そうした態度で蠻夷を見つめているところが韓愈や柳宗元とは蠻夷描寫の内容や敘情性が異ってくる一因となっているだろう。

ただ忘れてはならないのは、白居易のこの回想詩は、建前としてはこれらの蠻夷描寫は過去の華やかな長安の生活ぶりに比べて、今は風土風俗の全く異なる邊鄙な所にいる、そうした悲哀の文脈の中で語られていることである。「東南行」の第一段の終わりでは沈んだ調子になり、その最後には、

渭北田園廢

渭北 田園廢し

江西歲月徂

江西 歲月徂く

憶歸恆慘澹

歸るを憶いて恆に慘澹たり

懷舊忽踟躕

舊を懷いて忽ち踟躕す

と、容赦なく年老いていく中で、こんな蠻夷の土地とは早く離れて、都に、昔に戻りたい悲しみが第一段の締め括りとして表現されているのである。

「武陵書懷」や「東南行」の中にも、もちろん、蠻夷に對する嫌惡や恐怖感を示す句は見られるし、これまで挙げた劉禹錫や白居易の引用部分も見方によっては否定的に捉えることもできるだろう。ただそれ以上に、劉禹錫や白居易の土着の風俗や風習を述べた句には、意識的か無意識的かは分らないが、「左遷の悲哀を強めるための蠻夷描寫」という枠組みに収まりきれない表現の方が多い、という點にこそ留意しなければならない。このように「左遷した地での回想詩」という枠組みによりつつ、その枠組みを破壊して蠻夷描寫の段落が一人歩きし、様々に興味を引く材料を現代の我々にも提供しているところに、これらの詩の面白さがあるのではないだろうか。

この「東南行」は題にあるように八人の同僚に寄せられたが、それに唱和した詩は元稹の作品のみが残されている。

「酬樂天東南行詩一百韻（樂天の東南行に酬ゆ詩一百韻）」は、

「東南行」の翌年、通州（現四川省）司馬に左遷されてい

た時期の元和十三年（八一八）に、白居易の「東南行」と

すべて同じ韻字を用いて應酬した回想詩であり、元稹も同

様に冒頭から通州土着の風土風俗を書き綴っている。八句

目の自注で「此後每聯之内、半述巴蜀土風、半述江鄉物產

（此の後 每聯の内、半ばは巴蜀の土風を述べ、半ばは江郷の物

産を述ぶ）」と明言しているように、九句目からその風土産

業の様子が述べられているが、異民族の生活の様子を描い

た二十一句目からは、

芒屨涸牛婦

芒屨

牛を涸がす婦

丫頭蕩槳夫

丫頭

槳を蕩かす夫

醅醕荷裹賣

醅醕

荷に裹みて賣り

醕酒水淋沾

醕酒

水に淋ぎて沾る

舞態翻鸚鵡

舞態

鸚鵡翻り

歌詞咽鸚鵡

歌詞

鸚鵡咽ぶ

夷音啼似笑

夷音

啼くこと笑うに似たり

蠻語謎相呼

蠻語

謎にして相呼ぶ

蠻夷の光景（好川）

江郭船添店 江郭 船は店を添え

山城木豎郭 山城 木は郭に豎つ

最初の二句は、藁靴を履いて牛を泳がしている妻と、角

型の髪型をして櫂を漕いでいる夫の様子が描かれており、

夫の髪型からは白居易の詩で述べたのと同じおかしさが感

じられる。「醅醕」という絞った酒を蓮の葉に包んで賣つ

たり、「醕酒」という薄い酒を水にしたためて賣つたり。

蓮の葉に包むのは柳宗元の「柳州峒氓」にも見られ異民族

の風習を感じさせる行動である。この二句は、自注で「巴

民造酒如淋醋法（巴民の造酒 淋醋の法の如し）」と注されて

いる。「淋醋法」が具體的にどういうものかは分からない

が、土地ならではの地酒の釀造法を言っているのだろう。

續いて鳥に見立てた異民族の踊りや歌の様子、その言葉は

鳴いている様子が笑っているように聞こえ、言葉は聞き取

れないが相手を呼んでいる。「啼似笑」は普通なら「笑似

啼」の語順になり、平仄の問題で變えたということもある

が、まず自分の感覚では鳥の鳴き聲に聞こえ、それが人間

の笑い聲のようにも聞こえるのだと、言葉として全く理解

できない様子がよく表れている。船に店を構えているのも劉禹錫と白居易に既出の光景であり、城郭と大木が渾然一體化しているのもいかにも邊境という様子が感じられる。

以下引用は省略するが七十二句目まで巴蜀の風土の様子とそこにいる我が身の悲哀が描かれ、七十三句目から過去に遡り、長安での回想へと入る。このように、これまで取り上げた詩と内容面で共通する點が多く、また白居易や劉禹錫と同じように「左遷の悲哀を強めるための蠻夷描寫」という枠組みによりつつ、その枠に収まりきれない表現が多々見える面も共通している。さらに、元稹は白居易以上に句數を費やして巴蜀の風土風俗を描いており、元稹は詩を返す際に意圖的に蠻夷描寫の句數を増やしたものと考えられる。いわばこの二人は、自分が如何に風土の變つた土地にいるか、その怪奇さを如何にうまく表現するかをお互いに競い合っているかのようにも感じられ、その競い合いによって、蠻夷に對する様々に豊かな表現が引き出されていったのだとも言えよう。

この元稹の蠻夷描寫の丁度よい比較材料となるのが、同

じく元稹がこの詩より遡ること八年前の元和五年（八一〇）に江陵（現湖北省）土曹參軍の職に左遷されていた際に作られた「酬翰林白學士代書一百韻（翰林白學士の書に代うるに酬ゆ一百韻）」である。これの元となる白居易の詩は、長安に居た時に作られたので蠻夷については語られていないが、元稹の詩の中では時系列に沿った回想の途中に蠻夷描寫が見え、韓愈や柳宗元と同じ型の回想詩となっている。その一四九句目から見ると、

仰竹藤纏屋	竹を仰ぎて藤は屋に纏い
苦茆荻補籬	茆 <small>かや</small> を <small>おほ</small> 苦いて荻は籬に補う
麵梨通蒂朽	麵梨 <small>へた</small> を <small>た</small> 通じて朽ち
火米帶芒炊	火米 <small>のき</small> を帶びて炊く
葦筍鍼筒束	葦筍 鍼筒の束
鯁魚箭羽髻	鯁魚 箭羽の髻
芋羹眞底可	芋羹 <small>うごう</small> 眞に底ぞ可なるや
鱸膾漫勞思	鱸膾 漫りに勞思す
北渚銷魂望	北渚 魂を銷して望み
南風著骨吹	南風 骨に著きて吹く

度梅衣色漬

梅を度りて衣色漬り

食稗馬蹄羸

稗を食して馬蹄羸る

竹で屋根を覆うのは「武陵書懷」にも見えるが、この二句は自注に「南人以大竹爲瓦、用荻爲籬也（南人は大竹を以て瓦と爲し、荻を用いて籬と爲すなり）」と述べられているように、どちらの句も南方獨特の住まいを描き出している。次の二句にも自注が付けられている、「麵梨軟爛無味、火米粗糲不精（麵梨は軟爛にして味無く、火米は粗糲にして精ならず）」とあり、「麵梨」はヘタに包んで腐らせて食べる柔らかい無味なもの、「火米」は焼き畑から收穫された米と思われ、禾をつけたまま脱穀精米せずに食すると書かれてあるので、不味いと感じていたのだろう。以下も食事に關する描寫が續き、「葦筍」、「鰾魚」、「芋羹」という南方の郷土料理と思われるものが列擧されていくが、針の束と比喻されたりと食事として受け入れられないような内容であり、最後には「鱸魚の膾」の故事を持ち出して美味しい料理のある故郷へ歸りたいと述べている。故郷と都の方角である北に向かつて感情を押し殺して望み、反對からの南風

蠻夷の光景（好川）

は骨身にしみて吹いてくる。引用部最後の二句にも自注がつけられており、「南方衣服、經夏謂之度梅、顔色盡黧（南方の衣服、夏を経る 之を度梅と謂い、顔色盡く黧す）」と、梅雨を経て衣服が黒く變色する様子を表している。稗を食べた馬の足取りも重いというのも自注で「馬食菰蔣、蓋北地稗稗之屬（馬の菰蔣を食らうは、蓋し北地の稗稗の屬なり）」と、注の中でわざわざ南方の馬の食事について述べられている。

この詩を解釋するに当たり、特に目立つのが自注の多さである。自注は「武陵書懷」「東南行」「酬樂天東南行」にも見られ、こうした自注からは蠻夷の風俗をさらに詳しく説明しようとする態度が見受けられる。いわば、蠻夷を仔細に觀察しようとする觀察者としての態度の表れ、そして、従来の傳統の枠組みから外れた内容であるため、つまり共通の依って立つ基盤がない新しい分野であるがために、自注で言葉を費やして説明せざるを得ない事情もうかがわれよう。

上記の引用は江陵の土着の民の生活ぶりについて述べた

所を抜粹したが、以下も江陵の風土の様子が續いていく。

これを通州司馬時期との元稹と比較してみると、いささか詩の調子が異なっている點に氣づく。例えば、江陵の民の描寫は衣食住という最低限度の生活條件が主體であり、それすらも満足できるものではない様子が描かれているのに對して、通州時期の蠻夷描寫には土着の民衆の衣食住以外の娛樂、例えば地酒や舞踏、歌謠などについてまで描寫がなされていて、より廣い範圍で蠻夷に住まう人々を描寫しようとする姿勢が見て取れる。

また、その食事についても江陵の描寫はいかにも不味そうで受け入れられないように述べられていたが、通州での回想詩にも食事について述べた一節があり、「酬樂天東南行」の三十九句目からは様々な料理が列擧されている。

雜蓴多剖鱸 蓴を雜うるに多く鱸を剖き

和黍半蒸菰 黍に和すに半ば菰を蒸す

綠粽新菱實 綠粽は新菱の實

金丸小木奴 金丸は小木奴

芋羹眞暫淡 芋羹 眞に暫く淡く

鼈炙漫塗蘇 鼈炙 漫りに蘇を塗る

炰鼈那勝芋 鼈を炰るも那ぞ芋に勝えんや

烹鯨祇似鱸 鯨を烹るは祇だ鱸に似たり

じゅんさいに田ウナギの和え物、キビとまこもの蒸し物、

菱の實、金丸は自注に「巴橘酸澀、大如彈丸（巴橘は酸澀、

大なること彈丸の如し）」とある巴蜀特産の大型の柑橘類と

この四句は野菜料理や果物について述べられている。次の

「芋羹」は江陵での詩にも出てきたものであり、そのほん

のりとした味わいについて述べ、「鼈」は元稹のこの詩が

文獻に初めて見えるような言葉であり、味は別として竹を

食らう鼠の炙りものは他にはない珍しい料理だったのだろう。

最後の二句は素材が代替された料理について觸れ、ス

ッポンを炙つても子羊の代替に堪えるものではない。「鯨

魚」を鱸魚として煮ているのは、「通州俗に鯨魚爲鱸（通

州の俗は鯨魚を以て鱸と爲す）」と自注がされており、郷土料

理であることが窺える。

これらの表現では通州獨特の食事を美味として述べてい

るわけではなく、むしろその不味さが感じられる句もある

が、江陵での詩の料理描寫よりかなり具體性に富んでおり、蠻夷の地での食事の様子が現代の我々にも生き生きと甦ってくるかのである。江陵時代の無味な梨や脱穀しない米など不味いものばかりで故郷の料理が戀しいと述べているのに比べると、通州での蠻夷の食事は食事として許容し、不味さも含めてその異質な食事を楽しんでゐるのかのような印象を与えるのである。

この他にも、江陵の詩では蠻夷の言葉や風俗に對して「訛音煩繳繞、輕俗醜威儀（訛音 繳繞たるを煩い、輕俗威儀醜し）」（二六三、一六四）と「煩わしい」「醜い」と嫌惡感を示した動詞を用いてゐるが、通州では先に引用したように「夷音啼似笑、蠻語謎相呼（夷音 啼くこと笑うが似く、蠻語 謎にして相呼ぶ）」といくらか表現が和らいでゐるなどの相違點が挙げられる。

こうした違いを纏めると、江陵での蠻夷描寫はその締め括りに「我正窮於是、君寧念及茲（我正に是に窮まる、君寧ぞ念ひ茲に及ばんや）」（一七三、一七四）と述べてゐるように、土着の民の衣・食・住に着目しつつも、韓愈や柳宗元の回

想詩のように蠻夷に對する嫌惡感や拒絶感が好奇心よりも強く感じられる。それが通州の時期になると、描寫される對象がより幅廣く、より細かくなつており、嫌惡感や拒絶感も江陵での詩よりは薄らいでゐる印象を個々の句から受ける。蠻夷の地に長く暮らすことによる元稹自身の變化、それに白居易との競い合うかのような應酬詩のやりとりが、蠻夷に對するより細かな觀察眼を、そしてその心は餘裕を持つて蠻夷に對することに繋がつていつたと考えられる。

五 おわりに

これまでに取り上げた回想詩を制作年代順に並べると以下のようになる。

- 八〇五年 韓愈「縣齋有懷」 八十句
- 八〇五年 韓愈「赴江陵道中……」 百四十句
- 八〇六年 劉禹錫「武陵書懷五十韻」 百句
- 八一〇年 元稹「酬翰林白學士……」 二百句
- 八一三年 柳宗元「同劉二十八院長……」 百六十句
- 八一七年 白居易「東南行……」 二百句

八一八年 元稹「酬樂天東南行……」二百句

まず、詩形の問題から取り上げるならば、韓愈の「縣齋有懷」が仄韻の排律、「赴江陵道中……」が古體詩である以外はすべて五言排律であり、しかも最初の劉禹錫が五十韻であつたのが、白居易や元稹になると百韻にも及ぶ排律、しかも元稹は白居易の韻字百文字をすべて踏襲した詩を作り上げている。従来、自己の志を述べたり回顧したりするような詩はもともと言言古詩の役目であり、回想詩の源流となる杜甫の「壯遊」などの作品も五言古詩で作られている。それが五言排律へ、しかも時代が下るにつれてより長くなる傾向が見受けられるのが中唐の回想詩の特徴であり、百韻にも及ぶ應酬のやりとりは宋代以降にもまず見られない現象である。こうした現象が起つた理由を説明するこゝとは難しいが、まず文人達自身が意圖的により難易度の高い詩作に挑戦しようとした姿勢が窺えよう。五十二韻で劉禹錫から詩を送られてきた柳宗元が八十韻でやり返すというのもそうした挑戦的な意識の表れといえる。中唐の最盛期である元和年間前後は、形式においても表現技法におい

ても従來の枠組みにとらわれず様々に意欲的な試みがなされた時代である。對句單位ではなく、對をまたいだ二句ずつ毎に交代して詩句を競い合う韓孟聯句や、白居易の新樂府、「或……若……」をひたすらに連ねた韓愈の「南山詩」や、民間の歌謠を取り入れた劉禹錫の「竹枝詞」など、より難易度の高いことや新しいことを試作しようとする意欲が見られる。そこには、詩のありようというものを従來の傳統にとらわれず、新しいことを試みる態度自體に意義があるような意識が感じられ、より長編化していく排律や蠻夷描寫がこの時期になつて現れたのも、そうした時代の風潮と無關係ではないだろう。

また、内容面で見ると、最初の韓愈の蠻夷に對する嫌惡感や拒絶感を全面に押し出した詩を嚆矢として、様々な形で次第に好奇の視線も入り交じつた仔細に觀察する詩も描かれるようになり、それに伴い當初は描かれなかつた土着の民衆の産業や風習という生活ぶりがどんどん描かれるようになったといえる。

ここで斷つておきたいのは、韓愈や柳宗元の蠻夷に嫌惡

感を抱く作品が、劉禹錫や白居易の風俗や生活面を仔細に觀察した作品より劣っているということが言いたいわけでは決してない。三章で述べたように、韓愈の作品には嫌がつている自分を第三者の視点から見て極端に表現したような面白さがあり、また、柳宗元は左遷の悲哀をより深く突き詰めた味わいを感じられ、詩の優劣をつけることに意味はないのである。より重要なのは、一つの題材を描寫するのに従來の價值觀にとらわれず、より多様な方向性に各文人達が發展させていったことであり、また、その多様な價值觀を受け入れられる土壤が整っていたことにある。盛唐までの美しさや雄大なというような一元化されたバクトルの中で優劣を競うのではなく、より多元化された價值基準で各々が自己の個性を發揮させた蠻夷描寫を見せていく。韓愈のような蠻夷描寫が白居易の詩に出てくることはありえないし、その逆もまた然りである。韓愈や柳宗元、劉禹錫、白居易、元稹いずれもが蠻夷描寫の中で、自己の文學の持つ個性や特徴が反映された表現がなされており、中唐の中でそうした多様性が許容されているからこそ重要な

蠻夷の光景（好川）

である。^⑬

ただ、時代の流れという点から言えば、ゆるやかに紆餘曲折しつつも、やはり蠻夷の風土風俗を許容した蠻夷描寫という流れに傾きつつあるといえる。前章で述べた元稹の二つの回想詩に見える描寫の變化もそうであるし、また、韓愈も元和十四年（八一九年）に潮州（現廣東省）に流された時の詩作に見える蠻夷描寫は、陽山とはまた異なる特徴が感じられる。例えば食文化である。潮州での韓愈は蠻夷の食文化を主題とした詩が「答柳柳州食蝦蟆（柳柳州の蝦蟆を食らうに答う）」「初南食貽元十八協律（初めて南食し元十八協律に貽る）」の二首残されているが、そもそもそうした主題の詩があること自體が陽山期と異なっている。また、その内容に關しても、「初南食貽元十八協律」では最初に様々な珍しい動物の様子を列舉した後、それら癖のある食材を食することに對して、

我來禦魑魅 我來りて魑魅を禦ぐ

自宜味南京 自ら宜しく南京を味わうべし

調以鹹與酸 調うるに鹹と酸とを以てし

芼以椒與橙 芼するに椒と橙とを以てす

腥臊始發越 腥臊 始めて發越するも

咀呑面汗驛 咀呑して面汗驛^あし

鹽辛さと酸味でもつて味付けし、山椒とミカンとを羹に混ぜる野菜とし、そうすることで生臭さがようやく發散されるが、香辛料が多いために嚙んで飲み込むと顔から汗が噴き出て眞つ赤になる、といった様子が描かれており、嫌々ながらも無理矢理胃に詰め込むおかしさが生き生きと表現されている。柳宗元がカエルを食した詩に返答した「答柳柳州食蝦蟆」も冒頭からカエルに對してその形態を過剰なまでに事細かに描寫した後、「余初不下喉、近亦能稍稍（余初めは喉を下らざるも、近ごろ亦た能く稍稍たり）」と最初と比べて少しは喉を通るようになった様子が自虐的に描き出されている。このように、潮州期の韓愈の詩は、嫌々ながらもどこかそれを受け入れている自分を、詩の作り手という第三者的視點から描き出している滑稽な面白さがある。全く拒絶していた陽山期の韓愈とは、少しく變容しているのである。

こうした變容、つまり白居易や元稹、劉禹錫の回想詩に描かれるような、土着の民族の産業や風習を無視することなく、嫌惡感よりもその風土が變わっていること自體を樂しむかのように、肯定的に捉えようとする意識、これは中原と全く異なる蠻夷の奇怪な文化の價值を認めよう、いわばその個性を認めようという態度の表れといえる。左遷された際の詩というのはその悲哀を詠うのが從來の定型であり價值觀であつた。そうではなく、積極的に蠻夷の異なる風土風俗の面白さを見出そうとする姿勢、それは中唐の文人達が作り出した新しい文學の、敘情の形の一つである。左遷されるといふのは中原からすれば異分子と見なされるということであるが、その中で蠻夷という中原とは全く異なる存在にその個性的な價值を認めようとする認識の變化は、左遷された自分自身の價值觀や個性を再認識、再評價することへと繋がる。つまりそれは、左遷された文人達がその悲哀から乗り越えていこうとする際に、大きな役割を果たしたといえるのである。

これまでに述べた中唐内での變容は、そのまま後世に受

け繼がれていくわけではない。例えば、晩唐の李商隱は桂林という現代でいえば風光明媚な土地にしながら、その獨特の風景を全く無視して描寫していないというような例も見られる。しかし、宋代の文學へは確かに繋がっているように感じられる。

蘇軾は自身が惠州（現廣東省）や瓊州（現海南島）に流された際にも例えば以下のような詩を作っている。海南島にいる時に作られた「被酒獨行遍至子雲威徽先覺四黎之舍三首（酒を被りて獨り行き、遍く子雲・威・徽・先覺四黎の舍に至る三首）」という異民族である黎族の各家を訪問した第一首にはこうある。

半醒半醉問諸黎	半ば醒め半ば酔いて諸黎を問う
竹刺藤梢步步迷	竹刺 藤梢 歩歩に迷う
但尋牛矢覓歸路	但だ牛矢を尋ねて歸路を覓め
家在牛欄西復西	家は牛欄の西復た西に在り

この詩は山本和義氏が「海外の異郷に身を置いて、異民族と交わりつつ、そこにのびやかな東坡がいる。瘴癘の地に蠻夷と交わるが如き違和感は、この詩からは毫末の讀み

取れない」と評しているように、この詩に限らず遙か南方に左遷されても蘇軾の詩は一貫して悲哀に沈むことなく健全な樂しみ喜びを詠う詩に満ちている。^②中唐の蠻夷描寫は、こうした宋代士大夫の健全な詩へと、それはいわば海外の文學には見られない中國士大夫の文學のみが持つ、悲哀に沈まずそれを利用して喜びや樂しさ面白さを詠うことにも文學の價値を置くという、中國文學の大きな特徴に繋がっているのではないだろうか。

本稿に於いてはその大まかな全體像を掴むことを主眼としており、個々の文人、特に劉禹錫や白居易、元稹の回想詩以外での蠻夷描寫、また回想詩自體の特徴や蠻夷描寫との關わりなど、まだまだ興味は盡さないが、それらは今後の課題とし、稿を改めて述べることにしたい。

* * *

本稿は二〇〇六年七月二十九日に京都大學中國文學會における口頭發表をもとに加筆修正したものである。發表後、多くの方から貴重なご教示をいただいた。この場を借りて

感謝の意を表したい。

註

① ひとえに南方といっても、當時の文人達にとってどこまでが「蠻夷」と認識されていたか、明確な線引きをすることは難しい。本稿では文人達が違和感を感じる風土や風俗を「蠻夷」という言葉で表現することとする。また、「蠻夷」という言葉は本来差別的な意味合いを含むものであるが、その當時における認識をよく表すものであり、敢えて「蠻夷」という語彙を用いる。

② 林田愼之助「柳河東柳州抒情考」（『荒木教授退休記念中國哲學史研究論集』、一九八一年）、齋藤茂「劉禹錫の樂府詩について」（『中國詩文論叢』第七集、一九八八年）、拙論「柳宗元の柳州詩」（『中唐文學會報』、一九九九年）など。なお、本稿は拙論「柳宗元の柳州詩」と引用や論旨が一部重なっている。しかし前稿では、柳宗元より書かれて韓愈や劉禹錫が評價されておらず、各作品の肌觸りや読み方も今と異なる箇所が多くある。ここに全面的に書き改めたい。

③ 川合康三『中國の自傳文學』（創元社、一九九六年）「詩の中の自傳」参照。また、この章では杜甫を受け継いだ韓愈や白居易の自傳的な詩についても言及されており、韓愈のこれまでに見られない面として、夷狄の風土、氣候が延々と列舉されている點が既に指摘されている。

④ 韓愈の引用は錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』（上海古籍出版社、一九八四年）を用いる。

⑤ 仄韻の排律といっても二四の平仄が嚴格に守られているわけではなく、その規則の詳細は分からないが、朱彝尊の評に「此れ仄韻の排律、鎔裁甚だ工なり」とあるように、後世において仄韻の排律としても高い評價を受けていた。

⑥ 「颶」に關しては、『太平御覽』卷九にひかれる『南越志』に、「熙安間多颶風。颶者、具四方之風也。一日颶風、言怖懼也。常以六七月興。未至時、三日鷄犬爲之不鳴（熙安間颶風多し。颶は、四方の風を具するなり。一に曰く、颶風、怖懼を言うなりと。常に六七月を以て興る。未だ至らざる時、三日にして鷄犬之が爲に鳴かず）」とあり、夏の終わりから秋にかけて起こる南方特有の風で恐らく颶風を指し、南方獨特の氣象を述べる際によく用いられる語彙である。

⑦ 例えば、元和四年に書かれた書簡「與蕭翰林儉書（蕭翰林儉に與うる書）」の一節には、「蠻夷の中に居ること久しく、炎毒に慣習し、昏眊重腿、意以て常と爲す。忽ち北風晨に起こり、薄寒體に中たるに遇えば、則ち肌革は瘡懷、毛髮は蕭條たり、瞿然として注視し、怵惕して以て異候と爲す。意緒殆ど中國の人に非ず。楚、越の間の聲音特に異なり、鳩舌啞譟たるも、今之を聴かば、怡然として怪しまず。已に與に類と爲る。家生の小童、皆自然に曉曉として、晝夜耳に滿つ。北人の言を聞かば、則ち啼呼走匿す。病父と雖も、亦脫然と

して之に駭く」とある。

- ⑧ 柳宗元の引用は『柳宗元集』（中華書局、一九七九年）を用い、注釋や繫年は王國安『柳宗元詩箋釋』（中華書局、一九九三年）を参照した。

- ⑨ 「莽」は『方言』に「草、南楚江湖の間之を莽と謂う」とあるように、南方の言いまわしである。柳宗元にはこのようにその土地の方言を詩句に用いる技法がしばしば見られる。

- ⑩ 「白鷗」は『西京雜記』卷四に閩越王が漢の高帝に送った貢ぎ物の中にその名が見える鳥である。

- ⑪ もちろん、韓愈やこの後で述べる文人達の回想詩とは性格が異なり、柳宗元が自らの過去について多くの句數を費やして詳細に述べることはない。先の二十韻の詩もそうであるが、永州での柳宗元の蠻夷描寫を扱った詩は、その前半は自らと同じく南方に左遷された人の事跡を辿り、内面では自分と重ね合わせているであろうが、自らの人生の歩みは直接語ろうとはしない。そしてその後半部で、永州に幽閉されている状態を語る中で蠻夷の劣悪な環境が付随して述べられる、という點で共通している。つまり、柳宗元にとって重要な事件である永貞の改革に對する思いが述べられることはないのである。それが語られないのは柳宗元にとって如何に永貞の改革の失敗が重いものであったかを逆に物語っているよう。

- ⑫ その邊りの事情については、前野直彬、齋藤茂『韓愈』（集英社、一九八三年）七九頁、羅聯添『韓愈研究』（學生

蠻夷の光景（好川）

書局、一九八八年）「陽山之貶」などでその理由について考察されている。

- ⑬ 劉禹錫の引用は瞿蛻園『劉禹錫集箋證』（上海古籍出版社、一九八九年）を用い、あわせて蔣維松等『劉禹錫詩集編年箋注』（山東大學出版社、一九九七年）、陶敏等『劉禹錫全集編年校注』（岳麓書社、二〇〇三年）も参照した。

- ⑭ これら劉禹錫の蠻夷を主題とした各作品については、前掲の齋藤氏の「劉禹錫の樂府詩について」の中で詳しく考察されている。

- ⑮ 柳州獨自の蠻夷描寫の特徴は前掲拙論「柳宗元の柳州詩」を参照。

- ⑯ 白居易の引用は那波本（『白氏文集歌詩索引』、同朋社、一九八九年）に依る。

- ⑰ その序に朗州の土地に對して、「顧山川風物、皆騷人所賦、乃具所聞見而成是詩（山川風物を顧みるに、皆な騷人の賦す所なり、乃ち具に聞見する所もて是が詩を成す）」と述べている。

- ⑱ 元稹の引用は『元稹集』（中華書局、一九八二年）を用い、注釋や繫年は楊軍『元稹集編年箋注』（三秦出版社、二〇〇二年）を参照した。

- ⑲ もちろん地理的な要素も考慮しなければならない。蠻夷とはいえ長江の流れに程近い江州、朗州や通州よりも遙か南方に位置する永州や陽山の方が、より距離的にも文化的にも中

原から隔たっており、そういった面が詩の敘情性に影響をあたえた可能性は否めない。しかしながら、劉禹錫は陽山と同じ位置にある連州においても朗州と變わらぬ態度を見せているし、江陵より通州の方が僻地であるが、前章で述べたように元稹は通州の蠻夷描寫の方がより仔細に觀察され嫌惡感が薄らいでいる。地理的な問題だけでは片づけられないのもまた事實である。

- ⑳ 『蘇軾』（筑摩書房、一九七三年）「海外——精深華妙——」二〇七頁。また、同じく山本和義氏の「詩人と造物——蘇軾論考——」（研文出版、二〇〇二年）「嶺外の詩」なども参照。